

# 学園だより

Vol.78

2005.11  
Nara Women's  
University



秋の奈良公園(中川忠章前学生生活課長)

シリーズ 情報と人間を考える 1

サイエンス・メディアーション—社会と科学技術が共生するために

**佐伯和彦**

教養広場 Liberal arts Forum 3

翻訳の可能性

**鈴木広光**

免震ノススメ

**向井洋一**

寄稿 私のチャレンジ 5

渡邊慧美・佐藤友美・峯村綾香

卒業生からの寄稿 8

仲間として、そして先輩として…………… **藤井真悠子**

「感謝の気持ち」…………… **中林恭子**

前向きに生きる…………… **中川幸美**

佐保会だより 11

こんな本を出しました 12

渡辺和行・麻生 武・見目正克

高須夫悟・岩崎雅美

学生生活案内 15

広部奨学金授与式

授業料免除についてのお知らせ

学生表彰

第43回近畿地区国立大学体育大会の結果について

平成17年度奈良県インターンシップ

外国人留学生実地見学旅行

# サイエンス・メデイエーション — 社会と科学技術が共生するために —

佐伯 和彦

理学部 教授  
生物科学科 分子・細胞生物学講座



KAZUHIKO  
SAEKI

大学に在職していると、一体どんな研究をしているのかと問われることがある。答がいつも同じであれば話は単純だが、時により相手により、「分子生物学」であったり「ゲノムの研究」であったり、「植物と微生物の相互作用」であったり「マメと根粒菌の共生」であったり、さらにこれら以外であったりもする。それだけの返答で終わってしまう場合もあるが、次々に的を射た質問が続いて随分と深い対話となる場合もあるし、時には専門外の立場の考え方に逆に啓発されることもある。対話が心地好く続くときであっても、途中で腰が折れてしまつときであっても、「これは、マメ科植物と根粒菌が相互に情報交換することによって、共生する過程に似ている。」と感ずるときがある。本稿は、時折の感興に基づいた、社会と科学技術が共生することに向けての小さな提言である。

私が日々携わっているのは基礎研究なのだ、「環境に調和しつつ食糧増産を行う」という応用にもつながっている。研究は、基本的に公的な資金により行っている。成果を専門誌や学会で公表するだけでなく、一般社会に向けて情報発信していくことも大切な活動だと理解している。実際、市民との交流を目的とするイベントに出展するなどの活動も行ってきた。イベントに参加される一般の方々の多くは熱心で、情報交換は活発になされる。た

だし、こういったイベントは、元々興味を持っている積極的な人しか参加しないという落とし穴を免れない。積極的でない市民層にも、研究の意義を伝え、支持を求めること(支持・不支持の判断の基準を提供すること)の重要性は、今後ますます高まる筈である。一般市民が受動的に得られる科学技術情報は、テレビや新聞による報道である。少なからぬ場合、これらの報道のレベルが低いことに愕然とするのは、私だけだろうか。国内メディアによる報道でレベルの高いものもあるのだが、かなりの割合で中途半端なアナロジーが多用され、一般市民にも専門家にも不可解なものが出されていく。英国BBCなどによる報道の多くが深く正確なものに思えるのは、私だけの僻見であろうか。

自然科学とそれに基づく技術は極めて高度化し、多くの点でブラックボックス化している。生物学においても、つい十年前に夢であったことが現実化し、二十年前の最先端技術は学部生レベル以下の日常技術と化している。困ったことに(便利なこと?)(原理を知らなくとも、技術の恩恵を被ることは簡単になっている。そして、末端利用者である一般市民と、先端科学技術とのギャップは確実に拡大しつつある。社会全体として科学技術に対する認知度が低下することは困った問題である。それでは、拡大するギャップを埋め、本

質的な認知度を向上させるために、何が可能だろうか。その手掛かりは実はいたるところに存在しているとも言える。マメ科植物と根粒菌が営む相利共生を基に、我田引水なヒントを紹介する。

マメの仲間が痩せ地にも生育することは、古代のエジプトや中国においても知られていた。しかし、これが根粒中の共生細菌による窒素カプセルのアンモニアへの変換能力(共生窒素固定)に基づくことが明らかになされたのは、近代生物学が成立して後のことである。共生窒素固定は身近に知られた「共生」の例であるが、あまり知られていない特徴がある。その一つは、マメ科の植物ごとに異なる

根粒菌が存在すること、すなわちダイズにはダイズの根粒菌、レンゲソウにはレンゲソウの根粒菌が存在し、レンゲソウやエンドウの根粒菌をダイズに感染



レンゲソウに彩られる春の田



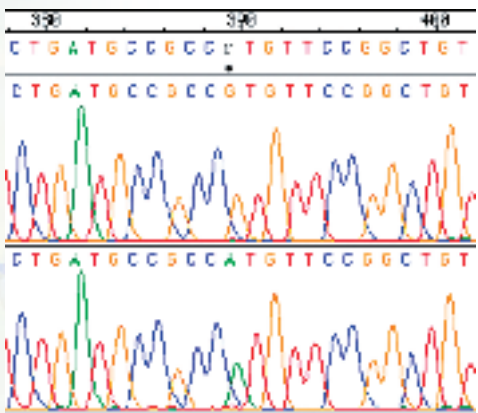
レンゲソウの花

させても共生しないこと『宿主特異性』である。二つ目は、根粒菌は植物の根に形成される「コブ(根粒)内」で、植物の細胞の中にまで入って共生すること『細胞内共生』である。さらに、窒素源が十分に存在する場合は共生も窒素固定も行わず、菌も植物も自由に生活するという特徴がある。細胞内共生を行う例は他にも存在するが、その多くではいずれかの共生体の自由生活能が低下する場合がほとんどであり、三つ目も際立った特徴である。

畑や庭の片隅にダイズなどを植えれば、ほぼ確実に根粒が形成されるので、窒素固定共生は容易に成立していると考えがちである。しかし、実はそうではない。植物側は、根から侵入して来る多様な病原菌と有効な根粒菌を区別し、病原菌であれば排除する必要がある。根粒菌側は、病原菌と誤認されないで、植物の細胞内への入り込む必要がある。このためには多段階の相互認証プロセスが存在している。

植物側も根粒菌側も、遭遇から共生の成立、窒素固定機能の維持へと至る過程で、それぞれの置かれた時間と空間的な状況に対応して、様々な遺伝子を動員し

て相互認証に備える。相互認証を行う鍵となつているのは、両者が分泌したり、細胞表面に露出したりする化学物質の構造である。例えば、マメ科植物はそれぞれに

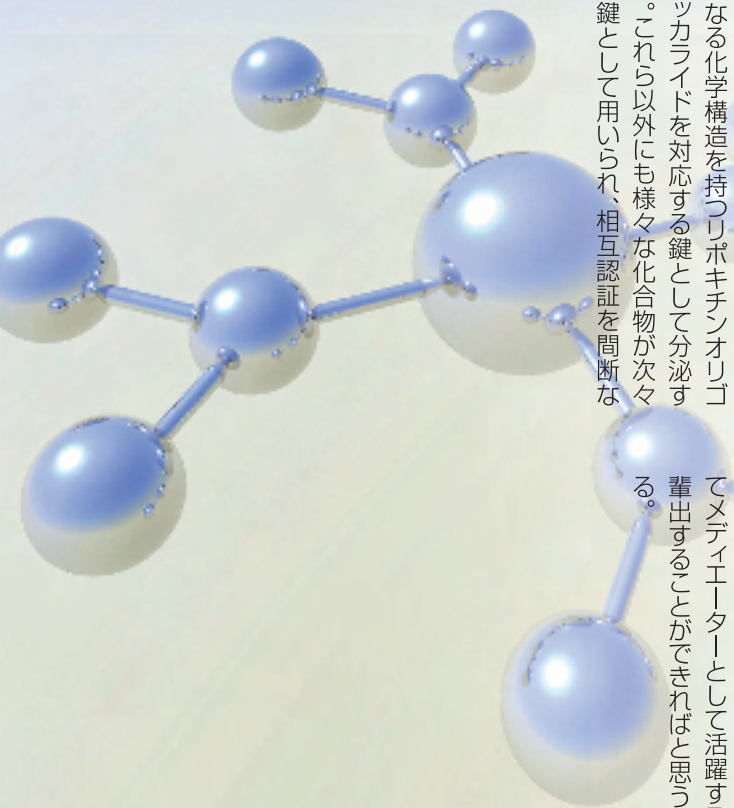


DNA-塩基の違いを示すデータ

異なる化学構造を持つフラボノイドやイソフラボンを根から分泌する。これを第一の鍵として、根粒菌はやはり根粒菌毎に異なる化学構造を持つリポキチンオリゴサッカライドを対応する鍵として分泌する。これら以外にも様々な化合物が次々に鍵として用いられ、相互認証を間断な

く行うことによつて窒素固定共生が成立し維持される。鍵と認証機構の全貌はまだ研究途上であるが、化学物質という媒介物により共生が達成される。

マメ科植物と根粒菌は共生の成立と維持によりそれぞれ単独では不可能な能力を獲得する。科学技術研究と現代社会の関係もこれに似ている。基礎研究・技術研究と一般社会が相互に認証し合い共生して初めて、二十一世紀の困難な世界を現実的に且つ希望を持って生きていくことが可能になる筈である。高度化した科学技術を一般市民に理解しやすく紹介するとともに、市民からの情報を科学者・技術者にフィードバックする媒介者が必要である。それを可能にするために、教育研究の場である大学は、科学者・技術者を送り出すだけでなく、有能な媒介者を送り出す義務がある。本学の現在そして将来の在学生の中から、大学院レベルで高度な研究体験を積んだ上で、それを生かしてメディアエーターとして活躍する人材を輩出することができればと思う次第である。



# 翻訳の可能性

鈴木 広光

文学部 助教授  
言語文化学科 言語情報学講座



HIROMITSU  
SUZUKI

翻訳はふつう、外国語に堪能な人だけに可能な特殊技能と考えられていて、事実、本屋に並んでいる翻訳をテーマにした本もほとんど翻訳家自身の経験にもとづいて書かれています。しかし本当にそうでしょうか。

わたしは、翻訳というのはわたしたちがふだん行っている言語活動となら変わらないものだと考えています。たとえば日常生活のなかでは、人の話を聞くと、その内容を自分なりのことばに置き換えて理解するといったことがしばしば行われます。またわたしたちはあることばを話すだけでなく、そのことばについて「言ひ」説明する「能力」を持っています。このような同一言語内における言ひ換えは、ある「ことば」の記号」と完全に等価な「他の記号」は存在しないこと、つまり、同義語は存在しないことを前提にしています。かりに意味が全く等価であれば、それはただの形式の置換に過ぎず、他の記号によって内容をはっきりと示すことは不可能になってしまうのです。

異なる言語からの、あるいは異なる言語への翻訳も、じつはこの同一言語内での「言ひ換え」と原理的に変わりません。

ある言語のなかで文化の真髄を表わすことばは他の言語に翻訳できない、とよくいわれます。たとえば「わび」「さび」といった美的概念を表すことばを、他の言

語で言い換えようとすると、たしかにその言わんとするところはなかなか伝わらないでしょう。しかし、それは他の言語だからではなく、同じ日本語の、たとえば「閑寂」「簡素」といった語（これも一種の翻訳です）によっても、その表わすところの全てを伝えることはできません。もちろん、説明の詳細を尽くして、よく似た内容を伝えることはできるかもしれない。しかし、それなら他の言語を用いても同じように可能でしょう。むしろ、こう考えるべきではないでしょうか。「わび」を英語の *simplicity* と言い換えたとき、全うではないにせよ（翻訳の前提からいえば、「全てではないがゆえに」といった方が良く）、*simplicity* と *simplicity* とは、明示化された、部分的な意味を理解できるのだ、と。

十九世紀半ば頃、中国で伝道をしてきたプロテスタント宣教師たちの間で、キリスト教の神を中国語訳するのに「上帝」と「神」のどちらがより適切かについての激しい論争がありました。「神」派は、旧約聖書で神をあらわす *Elohim* という語が神々の総称であること、その後の翻訳聖書でもその土地の神々の総称が訳語に選ばれたことを根拠にその正統性を主張しました。いっぽう、「上帝」派は、伝統的な *エロヒム* 解釈を再吟味して、

もともとの原語が「至高の支配者」を意味する語であったことを訳語選択の根拠として提出したのです。これを裏返していえば、「上帝」という中国語によって *Elohim* の隠れた意味が明示化されたということになるでしょう。

当たり前と思われていた事柄を相対化し、ことばの意味を活性化させていくこと。そんなところに、翻訳という言語活動の可能性があるように思われます。



中国語訳聖書



# 免震ノススメ

向井 洋一

生活環境学部 助教  
人間環境学科 住環境学専攻



YOICHI  
MUKAI

建物はそれぞれ得意な揺れの速さを持っており、軽く・固いほどせわしなく、重く・柔らかいほどゆつくりと揺れる。地震時の建物の揺れ方は、このような「重さ」とそれを支持する「バネ」の性質で決まる建物の「固有周期」によって特徴づけられる。

地面の揺れが建物の固有周期に近いと、建物の振動エネルギーはどんどん増していき、揺れが大きく育つ「共振」状態を生じる。一般に、地面の揺れが建物の固有周期よりも遅くなると、建物のバネ（弾性）が勝つのである。建物は地面と一体的に動く。一方、地面の揺れが建物の固有周期よりも速くなると、建物の重さ（慣性）が勝つのである。地面の揺れが建物の上の方まで伝わりにくくなる。

「免震」の原理は、一般的な地震動よりも建物の固有周期を「相対的」に長くしてやり、地面が大きく動いても、建物の上の方が慣性によりほとんど動かない状態とする事である。この発想は、水平方向に柔らかく大変形できる「アインレータ」と呼ばれる薄いゴムと鋼板とを交互に複数積層した支承装置により効果的に実用化されている。「免震」建物では、アインレータを基礎部に備え付けて地面と逆向きの変形を装置に負担させることで、建物部分の揺れと変形を同時に抑えることを実現する。最近ではこの免震が、戸建住宅に

も採用されるようになってきたが、住宅は従来の免震建物に比べるとかなり軽重であるため、ゴム製のアインレータでは、建物の重さに対して装置が相対的に固すぎると十分に長周期化できない。そこで、鋼球を足下に置いた「転がり支承」や摩擦抵抗の小さいプレートを足下に敷いた「滑り支承」などが、住宅用免震装置として利用されている。

ところで、免震建物が「効果」を発揮するためには、いくつかの条件がある。免震建物では、地面の動きと逆向きの変形を免震装置に生じるので、地面から見れば建物全体に水平方向の大きなずれを生じる。そのため敷地に余裕がなく隣接建物との間に十分なクリアランスがとれない場合は免震とするのが難しい。また免震の効果には、地盤と建物の性質が強く影響する。まず地盤がある程度固くなければならぬ。免震は建物の固有周期が地面の揺れよりも相対的に長い場合に「効く」のであり、地盤が柔らかければ建物の固有周期も相応に長くなる必要がある。また免震も技術的限界がある。さらに建物もある程度固くなければならぬ。免震は地面の動きを相殺する変形を免震装置に集約させることで揺れを伝えにくい構造となるので、建物が柔らかければ免震装置に

載せた建物に変形が流れてしまい、揺れを生じてしまう。土地、地盤、建物の個性によつては、免震との相性があまり良くない場合もある。

初めて免震装置を備えた建物が建設されてから、まだ四半世紀程度であるのだが、本格的な普及という意味での技術的課題はあるものの、免震構造に関する開発研究は一つの山を越えたと言える。免震がその効果を十分に発揮できれば、その上に載る建物内では地震時の揺れをほとんど感じず、家具の転倒等の事故を防いでくれる耐震上理想的な空間を得る事ができる。いわば、免震は地震の上に揺れを作らずである。現状ではまだ限定的とはいえ、免震は、従来の耐震技術が持ち得なかつた耐震グレードを実現したのである。



# 「銀河鉄道2005」

渡邊 慧美 文学部 一回生

EMI  
WATANABE

ものすごい、夏。まだ実感が無い。いつのまにか、私にとって十年分にも思われたこの夏が過ぎようとしていて、激流の中で何かをつかもうと、手探りしている自分がここに居る。

私はこの夏、あ組公演「鐘の鳴る丘2005」というお芝居に出演した。あ組とは、秋浜悟史先生に何らかの形で教えを請うた者が集い、ひと夏限定で一つのお芝居を作り上げる、その時だけの寄り集まりだ。秋浜先生は、尼崎のピッコロ劇団を創設され、日本初の公立高校演劇科を創られ、大阪芸術大学の舞台芸術学科長をつとめられた方。だから、あ組の「あ」は、秋浜悟史の「あ」。私は去年その演劇科を卒業したので、あ組に参加する資格を得たのだ。でも実は、私は今回の参加をずっと迷っていた。参加すればきっと良い経験になるに違いない。けれど、私の足を止めたのは、今のアルバイトだ。私は今のバイトが好きだ。私はバイト先で、主に大型のベビー用品を売っている。お客さんに怒られたり、鈍臭くて周りに迷惑をかけたり、反省ばかりしているが、それだけに毎日が新しい発見の連続で、やりがいを感じていた。不器用な私は、あ組に参加すると、きっとバイトには行けなくなる。と、どちらをやるのか。堂々巡りで悩んでいた私の背中を押してくれたのは、バイト先のマネージャーだった。「バイトはいつでもできるから、お芝

居の方に行きなさい！」単純すぎる私の心は、この時決まった。今は演劇に思い切りぶつかろう。やるだけやってみよう。と。お稽古が始まってからは、私は寝ているか走っているかのどちらかだった。そしてあの七月三十一日も、そんな慌ただしさの中で過ぎていくはずだった。けれどこの日、突然の知らせが舞い込んできた。秋浜先生が、亡くなられた。先生とお話する機会はずっと多くはなかった。でも、いつも身体に刺さるような言葉を私達にかけて下さった。「鐘の鳴る丘2005」が、秋浜先生の最後の台本になってしまった。この作品は、秋浜先生を天国へ送り出せるような作品にしたい。先生の最後のメッセージを伝えたい。あ組として集まったそれぞれが、理想と現実のギャップにもがいていた。幕が開くその時まで。

私が「鐘の鳴る丘2005」の中で演じた役は、ジョバンニ。私はこの役が好きだ。まっすぐに単純でいつも目を開いている。宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」でジョバンニは、友人のカンパネルラとの「死」という別れを経験する。私は、その時ジョバンニ自身の中でも何かが死んだのだと思う。それは、悲しみの意味の死ではなく、自分の中の何かとの別れ。私はこの夏、まっすぐに銀河鉄道に乗っていたのだろう。

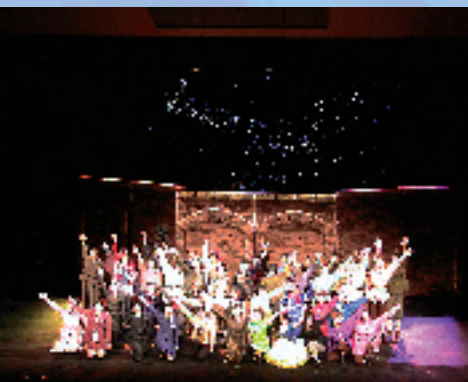
舞台が初日の幕を開ける約一時間前に、私の親友が自ら命を絶ち、今は昏睡状態

に陥っていると電話が入った。私は思う。身体は寝ていても、彼女は確かに、私の舞台を見に来てくれていた。私の伝えなかった言葉は届いた？ 一つずつ噛み締めて、私はそろそろ、自分の道を歩き出すよ。心配かけたね。銀河鉄道の旅を、ありがと。

はてしなく、かぎりなく星がなくても、星祭りを仰ぎ見るのだ、望むのだ。その銀河鉄道をその銀河鉄道を

今回のお芝居の中で、今の私に一番響いている歌詞だ。

ものすごい、夏。私を支えてくれたたくさんの人に、いっぱいはい、有り難うございました!! 渡邊慧美は、バンバン生きますーこれからも!!



# 私のチャレンジ

佐藤友美

理学部 物理科学科 四回生

大学に入ってから私の生活は勉強一色だった。活動範囲も狭く、生活のほとんどを学校と家で過ごしていた。さらに就職免許取得のためもあり二回生の夏休みなどは合計15日にも満たなかった。そんな日常から抜け出さなかったのと、何より自分の世界をもっと広げたかったこともあり、私はヨーロッパへ旅に出ることを決意した。仲間は同じスケジュールをこなしていた4人のクラスメイト。期間は夏休み15日中の11日間。実習が終わった次の日の早朝に出発して、帰国した翌々日にはまた実習という強行プランだ。しかも学生時代にしかできないような旅がしたかったのでホテルと航空券だけを手配した個人旅行にした。案の定、フランス到着早々道に迷った。到着時刻は夜の七時。あたりはすでに真っ暗だ。どうにか鉄道を乗り継いでホテル付近の駅までたどり着いたものの、ホテルが全く見つからない。私たちの手には自分と同じ程度の重さのスーツケースがあり、少し歩くだけでもかなりの重労働だった。周りの人に道を尋ねたいのだが話しかける勇気がない。しかし二時間ほど歩き回り九時も回ったところ、さすがに疲労と焦りを感じ、ようやく勇気を出して声をかけることにした。4人もいたらどうにか英語の知識を集結してフランスの人と意思の疎通ができるのではないかと期待したのだ。しかし驚いたことに英語が通じなかった。

当然だ。ここはフランスなのだから。相当な衝撃を受けた私たちにはもうすでに余裕がなく、手当たり次第周囲に声をかけ英語が話せる人を探した。しかしなかなか見つからない。ひとけも少なくなってきた。私たちの焦りもピークに達し、最後に店じまい中の果物屋に声をかけた。すると店の主人が「ちよつと待ってくれ」とチェアスチャーをして店の奥から別の男の人を連れてきた。その人は私たちに英語で「英語は話せますか?」と聞いてきた。英語の話せる人を連れてきてくれたのだ。私たちは顔を見合わせ、こういった。「Yes, please」。これにはさすがに苦笑されたが、それでもゆつくりとわかりやすい英語でホテルの前まで案内し、送ってくれたのだ。私はこれほどまでに人の好意に感動したことはなかった。ホテルの前まで送ってくれた人や果物屋の主人はもちろんだがそれ以前にも声をかけたほとんどの人が言葉も通じないような私たちの話を一生懸命聞いて力になるうとしてくれたからだ。感謝の気持ちでいっぱいになった。



チケットの買い方を周りの人々に聞いて地下鉄を乗り継いだり

その後もこの旅ではいろいろなことがあった。けれど、そのたび周りの人が助けてくれた。電車に乗り間違えて目的地にたどり着かなかった時には列車中の人が全員で私たちを助けてくれたり、間違えて座席指定列車に乗り込んでしまった時には遠足中の学校の先生が休みの生徒の席に座らせてくれたり、電車の臨時アナウンスが分からないで戸惑っていた時には現地の学生さんが私達くらいのことたない英語で話しかけてくれたり、数え切れないほどの人々から助けてもらった。果たして日本にいる私は戸惑っている海外からの旅行者に声をかけることができるだろうか?おそらく今までの私なら「英語ができないから」と言い訳を考えて無視をしていたらう。そんな自分のちよつぽけさがたまらなくなつた。今回、人の優しさにふれたことでこれからはもつと勇気を持って人を助けてあげたいと思うようになった。



遠足中の先生の助けをもらってたどり着いたハイデルブルグ

# より違った自分に 挑戦し続けて

峯村綾香

生活環境学部 生活環境学科  
アパレル科学専攻 四回生

AYAKA  
MINEMURA

オリエンテERINGという一つのスポーツに出会い、私は常に挑戦者であった。

私は幼い頃からずっと音楽をやっていたが、大学では何か新しいことにチャレンジしたかった。入学式の翌日に行われた学生協windy主催のクラス親睦会のととき、私のクラス担当がオリエンテERING部の人たちで、話を聞いているうちに私に合っているかも！と感じたのがオリエンテERINGを始めなきっかけだ。そのときは自分がここまでオリエンにのめり込むとは思っていなかった。縁はあるのだ。

オリエンテERINGは、地図とコンパス（方位磁石）のみを頼りに、山野に設置されたチェックポイントをいかに速く回ってこられるかタイムを競うスポーツで、自然の中を走り回る体力だけでなく、地図から地形を読み込む知力が必要だ。私はこのスポーツの楽しさは、地図を読み、自分の判断でルートを決定し行動するナビゲーションスポーツにあると思うている。

一回生の頃は月に一度大会に参加する程度だった。こんな私がオリエンに目覚めたのは一回生の十二月、翌年の夏にジュニア世界オリエンテERING選手権（JWOC）があることを知ってからだ。日本人は大学からオリエンを始める人がほとんどなので、少し頑張れば日本代表選手になることも夢ではないと思った。二〇歳以下の大会なので二回生が最後のチャンスだった。私はJWOCを意識してから、平日に少しずつ走り始めた。一回生の年度末に行われた、インカレと呼ばれる日本学生選手権大会の新人の部において二位に受賞し、私でも全国で戦えるレベルなのだと考えた。

二回生になって間もなく、JWOCの選考レースがあった。結果は、思うようなレースができず、選手にはなれなかった。だが、JWOCに挑戦したことはその後の私に大きく影響を与えた。JWOCに行った選手に負けたくないという気持ちで頑張った。その頃から、毎週大会や合宿に参加するようにになった。平日は朝や学校が終わってから、奈良公園や若草山などに走りに行く。マラソンが大嫌いだっただけが今では走ることが習慣となったのは、オリエンが速くなりたい、インカレで入賞したいという気持ちがあったからだ。

また、二回生と三回生の夏休みに海外

遠征に行き、多くの人に出会い、競技だけでなく様々なことに刺激を受けたことを嬉しく思っている。

そして三回生の時の秋のインカレにおいて、選手権クラスで三位に入賞した。表彰台に立ち、一緒に頑張った部の仲間や



インカレ表彰後、部の仲間と一緒に

指導してくださったコーチの方々、合宿や遠征先で知り合った全国の友人に祝福され、すごく嬉しかった。悩んだこともあったが、諦めないで本当によかったなと思っただ。

さて、今年は四回生で最後のインカレだ。私は去年よりも表彰台の高いところを目指して今挑戦している。さらに来年はユニバーシアード（国際学生競技大会）の日本代表選手になる目標もある。私はこれからも高い目標を持ち、それに向かって挑戦し続けたい。

CHALLENGE



## 仲間として、

## そして先輩として

藤井真悠子

文学部 人間行動科学科 教育文化情報学専攻  
平成十六年度卒業 富山市立大田小学校 教諭MAYUKO  
FUJII

イスをいただき、勉強になる。このように、同じ初任者でありながら様々な方と巡り会うことができ、楽しいひとときでした。

学生の頃は、先輩・後輩といってもせいぜい三年の差である。しかし、社会に出ると十年、二十年上の先輩から、自分の父親よりも年上の先輩方がたくさんおられる。経験豊富な先輩方の話は説得力があり、学ぶことが多い。今後、宿泊研修のような長い時間初任者と過ごす時間はもう無いが、これからも初任者の先生方とは、仲間として、先輩としてつながりを大切にしていきたいと思う。

さて、明日は登山班の仲間です。久しぶりに飲み会だ。どんな会話ができるか楽しみである。

「せんせー、〇〇さん水かけてね〜△△さんない〜」…。今日はこれで何人目だろう。そういえば〇〇の名前は最近よく聞くなあ。そう思いながら、現場へ向かう。一日の大半はこのような「クレーム処理」で過ぎていく。私にとっては三十一人の子供たちでも、子供たちにとって先生は一人なのだ。そのことに気がつくまで、数ヶ月かかった。

私は平成十七年度新規採用教員として採用され、ただ今小学校一年生の担任。先生も子供も、そして親もピカピカの一年生である。小学校の頃からずっと夢



クラスの子供たち、初任者指導の先生と

見ていた小学校の先生。奈良女子大学に進学を決めたのも、それが動機だった。しかし、勤めてみて夢からさめるのにその時間はかからなかった。授業以外の仕事の多さ、親との関係、初任者研修の忙しさ。隔週のペースで木曜日の午後は出張になる。ただでさえ思うように進まない授業が、どんどん遅れていく…。いつか「進め三進もいかない状況に、追い詰められ放課後に涙してしまいういともしばしばだった。

そんな私の支えになっているのは、同じ学校の先生と、初任者の仲間である。最初は私と同期で入ってきた先生や、以前からの友達同士で愚痴をぶつけ合う程度であったが、より広く仲間を作ることができたのは八月上旬に行われた三泊四日の宿泊研修であった。この研修では、いつものような講話の他に、野外炊飯や登山、ディスカッションでの実習があり、それぞれ活動する班が異なる。そして部屋割りも、毎日メンバーが変わる。こうして三泊四日を通し、初任者一九七名全員とはいかなくても、校種を越えてたくさん先生とふれ合うことができた。初任者には、実にいろんな人がいる。試験を八回受けて初めて通った人、企業に勤めていたものの、辞職して教員を志した人、一度教員を辞め、子育てが終わってまた復帰した人。私のような新卒は全体の中では半分にも満たない。新卒の先生方とは、「そうだよー。」と同じ境遇同士分かり合える気持ちがあり、経験豊富な先生方との会話は「それはこういうことなんだよ」とアドバ



夏季宿泊研修 登山での記念撮影

## 「感謝の気持ち」

KYOKO  
NAKABAYASHI

中林 恭子

理学部 化学科 平成十二年度卒業  
独立行政法人科学技術振興機構  
研究成果活用プラザ大阪

私は今、自分自身予想もしていなかった仕事に就いている。小さい頃から飽き性というか器用貧乏というか、一つの事に3年以上取り組んだ例がない。その私が大学での4年間に加え今もなお、科学に携わっているのだ。

在学中を振り返ってみると、大学3年の後半、周りでは進学を決めた者以外は既に就職活動に取り掛かっていたが、その頃の私は大学の勉強が忙しい、採用状況が厳しいなどと都合のいい言い訳をし、就職活動を始めないでいた。4年生になりそれなりに焦りはあったが、特別やりたい事もなく、どこかでどこで理系就職は無理だろうという諦めもあった。そんな気持ちを引きずったまま卒業し、明確な夢や野望もなく時間ばかりが過ぎていった。

しかしそんな私でも昔から夢を抱いていなかった訳ではない。小さい頃の夢はケーキ屋さん。人から「美味しかったよ」と言ってもらいたい、という単純な想いからそんな夢を抱いていた。その後様々な人々と出会い、多くの経験をし、高校に入ってから薬剤師に憧れるようになった。新薬を研究し、薬を処方して患者さんから「ありがとう」と感謝されたかった。しかし、薬学部受験への道はとても険しく、それでも薬学部一点張りの私に先生はこう言った、「自分が本当にやりたい事はそこでしか出来ないのか」と。そして初めて自分の事

についてじっくりと考える事ができた。

そしてやっと見えてきたもの、形は変わっているものの、根本的にずっと変わっていない自分の夢、憧れ、それはありきたりかもしれないが、人の役に立ち感謝される事であると気づいた。

そして現在、冒頭でも述べたように私は科学に携わる仕事をしている。



独立行政法人科学技術振興機構 研究成果活用プラザ大阪 外観

経済の活性化を目指して産学官の交流を推進し、地域の研究成果を活用した新規事業の創出を図ること、例えば、ある事業では大学等の研究を企業とのタッグにより育て、企業化を目指している。一見、

昔の夢からは程遠い仕事に思える。ただ、自分なりの解釈では、小さい頃抱いていた夢のようにダイレクトに人から感謝される仕事ではないが、間接的に人の役に立ち、社会のため、ひいては日本のため（スケールが大きくはすぎだが）へ繋がっていくものだとは信じている。もちろん私自身はそれ程大それた業務をこなしているわけではないが、毎日最先端の情報に触れ、偉大な先生方に囲まれ、そんな環境の中で仕事が出来ることには幸せを感じている。

考え方ひとつで人生どう進むか分からない。先の事はばかりを考えて周りも見ずに行動してしまうより、人の意見を素直に聞き入れ、時にはそれに流されてもいいのではないだろうか。家族はもちろんのこと、今まで出会った先生や友人の助言のおかげで私はここまでやってこられたと思う。人に感謝されたい、という強い想いは自身自身の周りの人達への感謝の気持ちから生まれたものなのかもしれない。漠然としていても何か自分の信念を持っている限り、どんな方向に転んでも行き着くところ自分の為になり、自分なりの解釈ができて、結果に結びついていくのではないだろうか。

何でもいい、他人から見ればどうでもいい様な想いでも信じて繋がっていればいい、大切な存在にたどり着けるかもしれない。

# 前向きに生きる

中川 幸美

生活環境学部 生活環境学科  
生活健康学専攻 平成十五年卒業  
ジャカルタ日本人学校 小学部教師



YUKIMI  
NAKAGAWA

日本人学校をご存じだろうか。日本人学校は、海外で生活している日本人の子ども達が、日本国内の義務教育に相当する教育を受けられるように設置された学校である。私は今年度四月から、インドネシアの首都ジャカルタにある、ジャカルタ日本人学校の小学部教諭をやらせていただいている。

今年二月、ジャカルタ日本人学校に派遣されることが決まった。その時から、私は、四月から始まる海外生活に、大きな期待と不安を抱えながら、慌ただしく準備を進めた。

インドネシアでは、時々テロが起きたり、感染症も多く、日本のように安心して生活できる環境ではない。また、インドネシア語も話せないのに、落ち着いて生活できるのか不安だった。さらに、今回、私は初めて学級担任を任されることになり、そのことも、不安要素の一つであった。

一方で、期待も大きかった。メイドさんがおり、家事全般をやってもらえることや、物価が安いこと。最も期待したことは、たくさん子ども達との出会いである。どんな子ども達とどんな新しい生活が始まるのか、楽しみであった。

そのような中で、私を支えて下さったのは、家族、友人、そして、私たちを迎えるために様々な準備をして下さったジャカル

タ日本人学校の先生方である。忙しい仕事の合間を縫って、こまめにメールのやりとりをして下さり、新生活への不安も徐々に和らいでいった。

ジャカルタでの生活が始まると、尚更、先輩の先生方に頼ることが多くなった。日常生活のあらゆることが、日本とは異なり、その一つ一つを丁寧に教えていただいた。インドネシア語の分からない私たちが変わって、買い物やあらゆる手続きを一緒にやっていただいた。そのようなサポートがあるからこそ、現在、私はジャカルタでなんとか生活できている。

みなさんの中には、一度は海外で生活してみたいと思っている方も多いだろう。私自身、ずっと持ち続けていた海外の日本人学校で教師をしたいという夢を、現在、実現している最中である。海外での生活は、日本の豊かな生活に慣れきった私たちにとっては、不便なことも多く、知らない間に大きなストレスを抱えてしまう。しかしそれはかりではない。日本にはない、ゆとりとした時間を持つことができたり、自分の考え方を变えるいい機会にもなる。

もし、海外で生活する機会があったら、是非、前向きな気持ちで頑張り続けて欲しい。きっと日本にはない、海外の素晴らしい景色をたくさん吸収できるだろう。

私自身、海外生活を始めたばかりで、ま

だまだ、不安は多い。この「前向きに生きる」という言葉を題にしたのも、自分に向けて一番言いたい言葉なのかもしれない。この言葉をいつも心に留めながら、海外生活を楽しんでいきたい。

最後に、日本人学校に興味のある方もいらっしやるだろう。日本人学校では、日本と同様の教育課程でありながら、海外にあるという特徴を生かしたプログラムもたくさんある。また、日本全国から先生方が集まっており、様々な刺激を受けることもできる。日本人学校に興味ある方は、是非、ジャカルタ日本人学校のHPを覗いていただきたい。そして、いつか世界のどこかで夢を実現して欲しい。

ジャカルタ日本人学校HP

<http://www.jijs.or.id/>



ジャカルタ日本人学校の職員室から撮った夕日

# 佐保会だより



## 平成の大修理 佐保会館

佐保会館は、佐保会が設立されて十四年目の昭和三年（一九二八）に建設されましたので、今年、喜寿をむかえたことになりました。

総工費約二万七千円は、約千四百名の会員と母校の先生や事務職員の方々の寄付と音楽会や購買部などの収益金が元になっています。

会館を設計したのは、吉野出身の建築家岩崎平太郎氏で、近鉄吉野線（当時は吉野鉄道）の駅舎や畝傍高校、天理教敷島大教会、阪本家別荘「白雲荘」、北村林業事務所と本邸など、県内に数多くの優れた建物を建てた人です。会館内部の調度品は、支部や会員、先生、そして、大学近隣の商店の方々からも寄せられており、現在も使われています。

会館竣工直後の会館口誌を見ますと、学生のクラス会が二ヶ月間で十四回も行われており、会館が同窓生のみならず、学生さんにもよく利用されていました。

昭和六年に佐保女学院（奈良佐保短期大学の前身）が設立されるまでの一時期に「二階では、「湖月」による出張喫茶室が開かれ、学生さんに憩いの場所を提供していました。レコードは七、八十枚、囲碁、将棋、麻雀、トランプ、カルタ、投球盤、投扇興、輪投げなどがおかれ、自由に遊ぶことが出来ました。戦争色のない良き時代であったことを窺わせます。

昭和二十四年、奈良女子高等師範学校が奈良女子大学となったあと、大学では教室が不足したため、佐保会館の二階が一般教養や教職科目の講義に使われました。昭和四十年代の中頃までのことです。私もここで授業を受けたひとりです。他大学とのスポーツ大会が奈良女子大学で開かれる時には、遠方からこられた学生さんや引率の先生の宿泊施設にもなりました。現在では、茶道部の皆さんが、毎木曜日に階下の大広間で、活動をされています。



佐保会館一階広間の床の間

近々、佐保会館は登録文化財となります。これを機に、佐保会では、佐保会館の大修理を計画いたしました。昔の工法を活かしながら耐震補強をすることと、屋根や外壁などの修理、水周りの整備、建具や内装の修理などを予定しています。その設計監理に当るのは、住居学科（住環境学の前身）の卒業生です。この修理にかかる約一億円の費用は、佐保会員や大学の教職員の方々から寄付を仰ぐことになっています。私達は、先人の育んでこられた文化をよい形で後世に伝えていきたいと思っています。

平成の大修理が完成しましたら、会員はもとより、大学や、地域の皆さんに多様な活動の場として利用していただきたいと考えています。学生の皆さんも、どうぞ、佐保会館にお気軽にお越し下さい。

（文責 足田洋子）

（佐保会館は、本年九月十八日に登録有形文化財として登録されました。）



# こんな本を出しました

## 「ヴィシー時代のフランス」

渡辺 和行

文学部 教授  
国際社会文化学科  
比較歴史社会学講座



今年は戦後60年ということで、先の戦争に関する話題が何かと多い年であった。

本書は、第二次世界大戦期のフランス社会を論じた古典的研究の翻訳である。著者は米国の歴史家で、原著は一昔前の1972年に出版されたが、ナチ占領下のヴィシー時代をトータルに捉える視点と、ヴィシー政府の国民革命が独自なものであったという主張は、その後の研究に大きな影響を与えた。

このようにヴィシー時代の研究は、フランス人によってではなくて、外国人研究者によって本格的に行われた点が重要である。レジスタンス神話に捉えられていたフランス人の歴史家には、対独協力やユダヤ人迫害などの負の歴史を直視することはできなかったからである。本書が「パクストン革命」と言われるゆえんだ。

最後に、本書が『毎日新聞』（2004年10月3日）の読書欄で取り上げられたことを付言しておきたい。

（「ヴィシー時代のフランス」ロバート・パクストン著、渡辺和行・剣持久木訳、柏書房、2004年、5,200円+税）



KAZUYUKI WATANABE

## 「乳幼児の心理 コミュニケーションと自我の発達」

麻生 武

大学院人間文化研究科  
社会生活環境学専攻  
人間行動科学講座  
教授



私はオーソドックスなテキストなど書きたくない（実は書けない）と思っていましたが、編集者が、自由に書いてもらえばよいと言ってくれたことが、この本を執筆した最大の理由です。私としても、それまでに執筆した「身ぶりからことばへ」（新曜社、1992）と「ファンタジーと現実」（金子書房、1996）と「子どもと夢」（岩波書店、1996）の3冊でやや専門的に論じたことを、「発達心理学」の本流に少しでもリンクさせるような教科書を書いてみるのも悪くないかな、と甘く考えたのがそもそもの始まりでした。しかし、一旦執筆を始めてみると、見開きの片方には必ず図表を載せるという本の形式は、大変な重荷でした。教科書を執筆するのは怖ろしいと改めて痛感した次第です。あえて言えば、売りは二つです。一つは、具体的なお子さんの姿が浮かび上がるようにエピソードをたくさん紹介したこと、もう一つは、問題を一緒に「考えよう」という姿勢でテキストを執筆したことです。

（「乳幼児と心理：コミュニケーションと自我の発達」麻生武著、サイエンス社、2002年、1,500円+税）



TAKESHI ASAO



原著者のサイモン・レヴィン氏は本著にて、地球上で営まれる生命圏―生態系―を一つの複雑適応系と見なした論理を展開し、人類が多大な恩恵を被っている生態系の機能と構造が如何に脆弱であるかを、さまざまな実例を引用して説いている。邦題の「持続不可能性」はいみじくも彼の論旨を端的に表している。生態学という基礎科学の観点からだけでなく、生態系の一員としての人類がその一部として存続するために如何に生きるべきかを明確に説く本著は、環境問題が喧しく叫ばれる現代に生きる我々に一つの指針を与えてくれる。本訳本は、この春に奈良女子大学を退職された重定南奈子教授と共同で翻訳し、2003年10月に出版されている。学園だよりに紹介文を寄稿する時機を逸していたが、奇しくも、サイモン・レヴィン教授が今年度の京都賞・基礎科学部門を受賞され11月に来日されることになみ、本著（原著・翻訳を問わず）が各方面で広く読まれることを期待する。

（「持続不可能性―環境保全のための複雑系理論入門」サイモン・レヴィン著、重定南奈子・高須夫悟訳、文一総合出版、2003年、2,800円＋税）

高須 夫悟

理学部 助教授  
情報科学科 自然情報学講座



FUGO  
TAKASU

## 「持続不可能性」 環境保全のための複雑系理論入門



著者長田須磨は私の母の姉であり、この本は母方の出身地奄美大島大和村にかかわる民俗的および言語学的な事柄について、叔母のことばで記された半学問的な本です。伯母は、やがて50歳になるうとする時、柳田国男博士の主催する女性民族研究会に参加し、独自の体験と知識を通じて、亡び行く奄美のことばと民俗の研究を始めました。私および私の伯父の大島信徳（元東京大学工学部教授）は、主婦であった伯母と言語学研究者の間に立ち、研究および出版の手助けをしてきました。伯母は平成8年に亡くなり、私は大島および言語学者の須山氏と共に、伯母の遺稿を集めて、この本にしました。本の表紙の写真は、母方の家にはありませんがドゥグン（胴衣）とアムシラレの扇など（東京国立博物館へ寄贈）の写真です。奄美大島大和村で計画進行中の「長田須磨文庫」には、次の言葉が掛けられています。「ムンヌシリハテヤナン」（知的探求には際限無し。）

（「奄美随想 わが奄美」長田須磨著、監修 須山奈保子、大島信徳、見目正克、2004年、海風社、2,600円＋税）

## 奄美随想

## 「わが奄美」

見目 正克

理学部 教授  
物理科学科 基礎物理学講座



MASAKATSU  
KENMOKU



「生活文化学の愉しみ」  
ライフスタイル・こころ・もの・からだ」



平成5(1993)年10月に奈良女子大学家政学部は改組により「生活環境学部」に改名すると共に、内部には〈安全〉と〈快適〉をキーワードとする「生活環境学科」と、〈安定〉と〈豊かさ〉をキーワードとする「人間環境学科」の二つの学科が置かれました。生活文化学講座はその人間環境学科の一つとして今年で創立12年になりますが、この辺で一つその特色をテキストとして表わしてみよう、という試みがこの本になりました。

執筆者はもとより現在のオールキャストですが、私たちの学部や大学院の出身者で大学教員をしている人たちにも加わってもらいました。生活文化学は新しい学問ですが、私たちの特色は、家族、衣、食、住、病いなどの身近な生活の中から歴史的な面白さや種々の問題点を見つけ出し、それぞれに合った研究方法を用いて問題を解明しようとするところにあります。生活文化学入門の書としては是非扉を開けてご覧下さい。

(「生活文化学の愉しみ—ライフスタイル・こころ・もの・からだ」岩崎雅美・上野邦一編著、昭和堂、2005年、2,600円+税)

「中国・シルクロードの女性と生活」



最近NHKが「新シルクロード」を放送したり、東京や神戸で開催の「新シルクロード展」では唐代の楼蘭壁画が初公開されるなど、シルクロードが話題を呼んでいます。

本学はシルクロードの終着点とも言われる古都奈良にあり、私たちもやはりシルクロードには特別な関心をもっています。しかしここでは古代の文物の魅力とは異なり、現代中国の西域の人々の生活に目を向けています。中国は社会主義の国ですが西域はイスラム文化圏です。また広大な砂漠を有する乾燥した地形は、生活にとっても厳しいものです。中国・新疆ウイグル自治区の特にウイグル女性の生き方を、家族・衣・食・住の女性ばかりの研究者が民家訪問を通して調査し、たとえば都市と農村、北と南の地方の比較、社会主義の政策とイスラムの伝統との衝突などを日常生活の場から検討しています。調査で得た多くの写真を全てカラーで掲載していますので、楽しく読んで頂けると幸いです。

(「中国・シルクロードの女性と生活」岩崎雅美編、東方出版、2004年、2,000円+税)

岩崎 雅美

生活環境学部 教授  
人間環境学科 生活文化学講座



MASAMI IWASAKI

## 広部奨学金授与式

平成17年度広部奨学金授与式が、7月7日(木)に事務局管理棟第二会議室で行われました。

同奨学金は、本学卒業生の故広部りう殿(福井県出身 奈良女子高等師範学校本数物化学部1期生 大正2年3月卒業)のご遺志により寄附された資金をもって設けられた奨学金制度で、人物・学業ともに優秀な本学学生に授与するもので、今年度は次の8人に証書及び奨学金が井上副学長(教育・学生支援担当)から贈られました。



文学部	国際社会文化学科	4回生	永井順子
文学部	言語文化学科	4回生	浜田ふゆみ
理学部	物理科学科	4回生	西海和那
理学部	化学科	3回生	北村明日香
生活環境学部	生活環境学科	4回生	津内久美子
生活環境学部	人間環境学科	4回生	坪田梓
人間文化研究科博士前期課程	生活環境学専攻	2回生	永田恵子
人間文化研究科博士後期課程	複合現象科学専攻	3回生	山口智美

## 授業料免除についてのお知らせ

平成18年度前期分授業料免除及び徴収猶予に関する出願書類の交付及び受付を下記のとおり予定していますので、出願を予定している人は忘れずに学生生活課で手続きを行ってください。

おって、詳細については1月下旬に掲載しますので注意してください。

出願書類交付:2月上旬～3月上旬  
出願書類受付:3月上旬～3月中旬

## 学生表彰

学生表彰制度による表彰式が、7月29日(金)に学長室で行われました。

この制度は、課外活動や社会的活動などで特に顕著な成果を挙げた本学学生の個人又は団体が表彰されるもので、今回は次の2名の学生と1団体が学長より表彰を受けました。



- (個人) 上野 明日香(生活環境学部4回生・アイススケート部)  
 第4回 関西学生フィギュアスケート競技大会 2部女子 第3位  
 第25回 国公立大学フリースケーティング競技会 Aクラス女子 第1位  
 鈴木 智葉 (文学部2回生・アイススケート部)  
 第25回 国公立大学フリースケーティング競技会 Dクラス女子 第2位  
 (団体) アイススケート部  
 第25回 国公立大学フリースケーティング競技会 女子総合 第3位

## 第43回近畿地区国立大学体育大会の結果について

第43回近畿地区国立大学体育大会(当番大学:滋賀大学他)が8月4日(木)～26日(金)に開催され、熱戦が繰り広げられました。

本学は9種目に参加し、総合成績では惜しくも入賞を逃しましたが、次の団体・個人が見事入賞を果たしました。

《団体》	卓球(第2位)・硬式テニス(第3位)・弓道(第3位)
《個人》	陸上競技 女子 走幅跳 第1位 宮田知佳(生・4)
	女子 砲丸投 第2位 宮田知佳(生・4)
	水泳 女子 100m平泳 第2位 近藤優美(理・4)
	女子 200m平泳 第3位 近藤優美(理・4)

## 平成17年度奈良県インターンシップ

奈良県インターンシップ制度は、奈良県経営者協会、奈良県工業会などの産業界、奈良労働局・学生職業相談室の行政機関と県内の国公私立10大学の産学官が密接な連携のもとに実施される就業体験です。

平成17・18年度は本学が事務局幹事校となって実施していますが、7年目を迎えた今年度は、68の受入企業・団体、12大学(他府県大学2校を含む)168名の学生が参加し、6月4日(土)の実習希望企業・団体との面接会、6月18日(土)の事前研修会を経て、夏季休業期間中の10日間(実習期間)に実習を行いました。本学からは15名の学生が参加し、14の企業・団体で実習を終えました。

10月1日(土)には実習発表会(事後研修)が開催され、参加した学生からは、「自分の仕事に対する見方が変わった」「これからの職業選択に大いに参考となった」などの声が聞かれました。



▲(上写真2枚)本学記念館講堂で開催された実習先企業・団体との面接会の様子(6月4日)



参加資格は学部2・3回生ですが、在学中から職業人として必要な基礎能力やキャリア形成力を養う良い機会です。

来年度は是非あなたも参加してみたいかがですか。

◀6月18日開催の事前研修会班別討議での1コマ

## 外国人留学生実地見学旅行

9月15日から16日に留学生実地見学旅行が実施されました。今回は留学生43名と、留学生担当教員及び事務職員の総勢46名が参加しました。

当日は好天にも恵まれ、初日はキリンビール名古屋工場でのビール生産過程を見学し、その後「ノリタケの森」に向かいました。ノリタケの森では、陶器のコップや皿に絵を付ける作業を体験しました。

二日目は早朝8時にホテルを出発し、一路愛知万博の会場へ向かいました。愛知万博ではそれぞれ目的のバビロンなどを見学し、名残を惜しんで帰路に着きました。

留学生が相互の親睦を図りながら、日本をより深く理解するという留学生実地見学旅行の目的を達した旅でした。

